

# 日本語の発話における副詞の意味・機能の弱まりに関する一考察 —テキストマイニング手法と目視による分析を通して—

## A Study on Weakened Phenomenon of the Meaning and Function of Adverbs in Oral Japanese Analyzed through Text-Mining and Observation

原田 朋子

### 要 旨

本稿では、話し言葉の発話頭において多用される「けっこう」「かなり」「たぶん」「きっと」「べつに」「やはり」を対象にテキストマイニングと目視の両面から分析を行った。その結果、副詞の分類との関連性から、潜在比較の程度副詞と位置づけた「けっこう」と「かなり」について、書き言葉ではなく、話し言葉で多用された場合に、それらとそれらがかかる述語との距離が離れ、結びつきが弱まり、シンタクスレベルの機能が弱体化している現象があるということが認められた。また、陳述副詞については、呼応する述語の形式に特別の言い回しを要求するかどうかという誘導の職能の観点から、書き言葉では特別の言い回しを要求する「たぶん」「きっと」「べつに」が、話し言葉では、その誘導の職能が弱まっていることが確認できた。そして、陳述副詞の中でも、書き言葉においても特別の言い回しを要求せず、多岐にわたる評価の意味を有する「やはり」は、話し言葉の中では、意味の軽化、機能の弱体化の例が複数確認できた。つまり、副詞の中でも、話し言葉で多用された時に、意味や機能が弱まるといった現象がどの副詞でも起こり得るということではなく、潜在比較の程度副詞や誘導の職能が弱まった際の陳述副詞や、陳述副詞の中でも、元々誘導の職能がさほどないものについて、話し言葉の中で多用された場合には意味も機能も曖昧なものになるという現象を明らかにした。

### キーワード

日本語 副詞 誘導 話し言葉 テキストマイニング

### 1 はじめに

本稿は原田 (2021) の続稿である。原田 (2021) は、談話標識のうち、フィラーの機能を確認した上で、副詞、接続表現について、フィラー化するものを少数挙げた。また、原田 (2021) では、話し言葉の発話頭における出現頻度及び意味的観点からの

考察により、一定の結果が得られた。しかし、何故そういった現象が起きているのか、頻度や意味の考察の他にも、対象語が持つ元来の機能に着目するなど、より詳細な分析にまでは至っていなかった。例えば、副詞の中のどのようなものについて、副詞としての本来の意味が軽化し、機能が弱まるのか、とりわけ副詞の分類との関連性にまで踏み込んで言及を行うには、新たな視点での分析方法を加える必要があると考えられた。そして、さらに多くの用例を採取するばかりでなく、書き言葉での使われ方とも比較する必要もあると思われた。

用例数に言及すると、その数が少なければ、証左に乏しく、推測、印象の域を出ず、実証されたとは言い難い。そこで、本稿では、テキストを単語や文節などに分割する自然言語処理方法を介し、パターンを集計し、計量的に解析し、テキストデータを統一的な視点から客観的に分析することが可能になるテキストマイニングを用いる。そのことにより、より多くの用例を分析し、再現性、客観性の高い結果を可視化する。さらに、本稿では、目視による質的分析も組み合わせ、分析対象の副詞の連用の機能、つまり、主に用言との結びつきの強さ、誘導の機能、すなわち特別の構文を要求するかしないか等の観点からも分析することにより、副詞の分類との関連性の考察を試みる。

## 2 「けっこう」「かなり」「たぶん」「きっと」「べつに」「やはり」の位置付け

副詞は一般的に様態副詞と程度副詞と陳述副詞等に大きく分けられる。様態副詞は動作の状態や様子といった客観的な描写を表す。程度副詞については、渡辺実(2002)が、何を以て程度副詞とするかによって判断は小さくない幅をゆれると前置きした上で、相対的状态性概念の語を修飾する副用語に範囲を限れば、そこに程度副詞の体系らしきものが認められると述べている。そして、「とても」と「もっと」を、程度副詞らしい程度副詞の代表として挙げ、「とても」は「Xは—A」という「計量構文」と呼び、「もっと」は「XはYより—Aだ」という「比較構文」と呼んでいる。さらに、程度副詞の中に、このような二つのタイプにきれいに対立せず、現象的に計量構文にも比較構文にも立つ程度副詞があるとし、その一つとして「多少」を挙げている。「多少」は計量、比較の両構文に共に収まり、性格的に二重或いは曖昧な程度副詞ということになると指摘し、そういったものを「潜在比較」の程度副詞と呼んでいる。

また、渡辺実(1996)は、従来「陳述副詞」と呼ばれてきたものについて、「もし」が「～たら」の仮定、「たとえ」が「～ても」の譲歩、「けっこう」が「～ない」の否定などの特別の言い廻しを要求するという構文的職能の観点に着目し、「誘導副詞」と呼んでいる。本稿では、原田(2021)で抽出した副詞の一覧「表1 副詞の出現回数と発話頭出現率(抜粋)」のうち、発話頭に多く出現していて、且つ書き言葉にも使われる程度副詞の中から「かなり」と「けっこう」を、陳述副詞の中から「たぶん」「きっと」「べつに」「やはり」を取り上げるが、「かなり」と「けっこう」は渡辺実(2002)

の「潜在比較」の程度副詞と位置付ける。そして、「たぶん」「きっと」「べつに」「やはり」を陳述副詞と呼ぶものの、渡辺実 (1971) の誘導の職能に着目し、分析を進める。

表 1 副詞の出現回数と発話頭出現率 (抜粋)

	副詞出現回数合計	発話頭出現回数合計	発話頭出現率
やっぱ	317	284	89.6
なんで／何で	586	317	54.1
まあ	1102	396	35.9
かなり	127	44	34.6
まず	104	36	34.6
たぶん	630	171	27.1
ほんとに	649	172	26.5
もう	3383	879	26.0
本当に	163	42	25.8
別に	411	98	23.8
よく	492	117	23.8
ずーっと	111	26	23.4
結構	803	184	22.9
ちょうど	128	28	21.9
もっと	231	47	20.3
もちろん	123	24	19.5
とにかく	138	26	18.8
いつも	210	39	18.6
ほとんど	117	21	17.9
やっぱり	1078	193	17.9
そんなに	293	51	17.4
きっと	188	32	17.0
なんて	161	27	16.8
初めて	121	19	15.7
ちゃんと	373	54	14.5
何とか	114	16	14.0
いっぱい	242	28	11.6
ずっと	232	25	10.8

### 3 テキストマイニングと目視による意味・用法の分析

#### 3.1 分析対象と使用したテキストマイニングツール

分析対象は、「青空文庫」(1925年以降に生まれた作家の作品100冊)、「名大会話コーパス」<sup>1</sup>(100会話)である。テキストマイニングによる分析を実行するにあたっては、障害となる記号やルビや注釈等を削除(データクリーニング)した。その上で、金明哲氏によって開発されたMTMineR (Multilingual Text Miner with R)を用いて、テキストマイニングによる分析を行った。MTMineRは、テキスト型データを構造化して集計し、 $R^2$ を用いて統計的に分析するソフトウェアである。

分析のもう一つの準備段階として、全てのテキストの中から対象語である「けっこう」「かなり」「たぶん」「きっと」「べつに」「やはり」を抽出するため、MTMineRのMeCabにより形態素解析を実施した。

なお、「けっこう」については「結構」、「たぶん」については「多分」、「べつに」については「別に」、「やはり」については「やっぱり」「やっぱ」「やっぱし」なども含めた。

### 3.2 出現頻度に関する分析

次に、MTMineRのn-gramを用いて「けっこう」「かなり」「たぶん」「きっと」「べつに」「やはり」を抽出し、それらの出現数を集計したものが表2である。対象としたデータは各々抽出対象字数が異なっているため、10万字当たりの出現数を算出し、比較することとした。

表2 青空文庫と名大会話コーパスにおける出現数

	青空文庫（書き言葉）			名大会話コーパス（話し言葉）		
	出現数	対象字数	10万字当たりの出現数	出現数	対象字数	10万字当たりの出現数
けっこう	143	4,591,159	3.1	972	1,392,117	69.8
かなり	614	4,591,159	13.4	172	1,392,117	12.4
たぶん	216	4,591,159	4.7	745	1,392,117	53.5
きっと	352	4,591,159	7.7	212	1,392,117	15.2
べつに	213	4,591,159	4.6	629	1,392,117	45.2
やはり	643	4,591,159	14.0	1,690	1,392,117	121.4

表2から、書き言葉においては、「やはり」「かなり」が比較的多く使用されており、「けっこう」「たぶん」「べつに」は幾分少ないことが分かる。一方で、話し言葉においては、「やはり」の使用が極めて多く見られる。また、「けっこう」は書き言葉の20倍以上、「たぶん」と「べつに」は書き言葉の10倍程度使用されているという顕著な差が見られた。「きっと」は書き言葉の2倍近く見られたものの、「かなり」の使用数には大きな差は見られなかった。

さらに、「けっこう」「かなり」「たぶん」「きっと」「べつに」「やはり」が「青空文庫」の文頭及び「名大会話コーパス」の発話頭にどの程度現れているかを分析した。その結果を図1に示す。

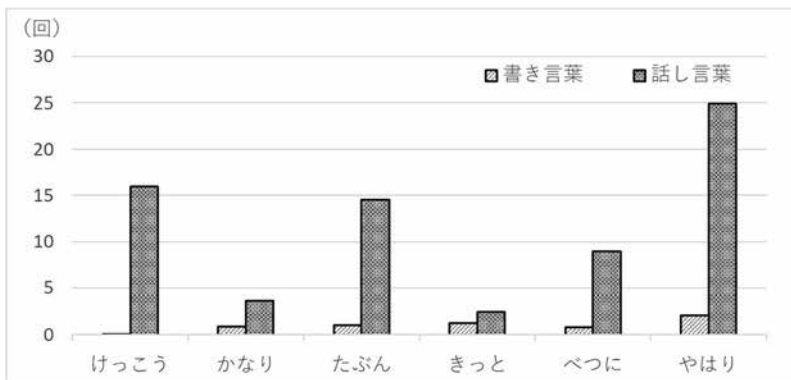


図1 文頭及び発話頭出現率

図1から「けっこう」「かなり」「たぶん」「きっと」「べつに」「やはり」は全体的に書き言葉の文頭には現れにくいと言える。とりわけ「けっこう」は書き言葉の文頭にほとんど見られなかった。「かなり」「たぶん」「きっと」「べつに」の文頭出現率に大差はないが、「やはり」はこれらの中では文頭にやや多く見られた。それに対して、話し言葉においては、発話頭に「やはり」「けっこう」「たぶん」「べつに」が非常に多く見られることが分かる。中でも「やはり」は発話頭に際立って多く出現している。

以上のことから、「やはり」「けっこう」「たぶん」は話し言葉の発話頭において多く使用されることが明らかになった。

### 3.3 「けっこう」「かなり」「たぶん」「きっと」「べつに」「やはり」に関する意味・用法の詳細の分析の手順

「けっこう」「かなり」「たぶん」「きっと」「べつに」「やはり」をより詳細に分析するために、指定したキーワードとその前後の文脈を原文から抽出することができるMTMineRのKWIC検索機能を使用し、書き言葉及び話し言葉、それぞれ100例程度を抽出した。

続いて、それらの文章を文節解析ツールibukiC<sup>3</sup>により文節毎に分け、目視により対象語がかかる述語を抽出した。

#### 3.3.1 「けっこう」に関する分析

本項では、「けっこう」がかかる述語との結びつきの強さを分析するため、「けっこう」と共起する述語との間の文節数を調べた。図2は書き言葉、図3は話し言葉を対象にしたグラフである。グラフ中の数字は、「けっこう」と「けっこう」がかかる述語が何文節離れているかを示したものである。なお、「けっこう」の次の文節に「けっこう」がかかる述語が出現する場合を1と計測することとし、また、呼応しているのが述部の場合、その中でもその副詞がかかる主に用言との文節数を示すこととした。以下、本稿中において、同様の取り扱いとする。

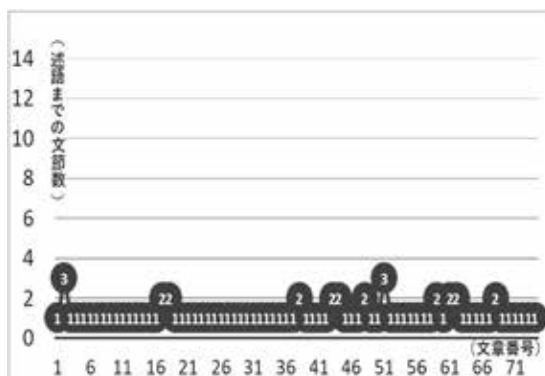


図2 「けっこう」がかかる述語までの文節数（書き言葉）

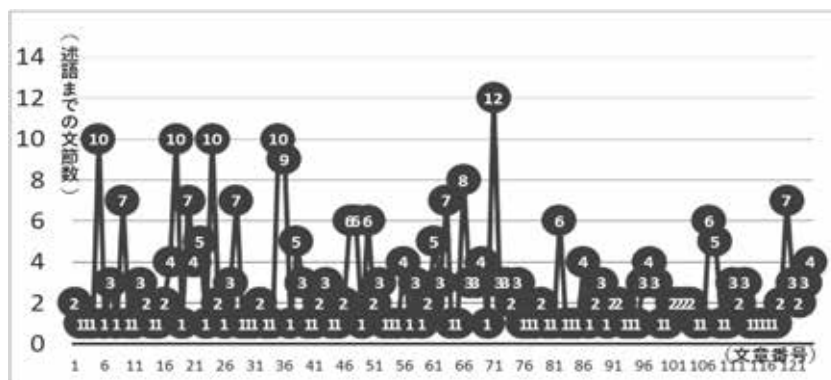


図3 「けっこう」がかかると述語までの文節数 (話し言葉)

図2から、書き言葉において、「けっこう」がかかると述語との間の文節数は平均1.19であり、例文(1)を見ても「けっこう」と「けっこう」がかかると「高い」との結びつきはかなり強いことが窺える。

例文(1)

トーナメント試合の入場料はけっこう高いが、その入場券が無料で手に入るのである。  
(『創世記考』西府章)

図3の話し言葉においては、「けっこう」がかかると述語との間の文節数が平均2.73で、両者の結びつきが文節数の観点から書き言葉よりも弱まっているように思われる。例文(2)では「結構」は「てきぱきとした」或いは「多い」にかかっているように見受けられるが、「結構」が実際、何にかかっているのか、判別が難しく、例文(1)ほど「けっこう」とそれがかかると述語との結びつきが強いとは言えない。

例文(2)

猿之助さんの踊りってさ、結構ほら、あの、富十郎さんとよく2人でやってるような踊りこむこう、てきぱきとした、ああいう踊りが多いじゃない。(『名大会話コーパス』data034)

例文(3)は、「結構」が「好きだから」にかかっているようにも読み取れるが、もはや、話し手ですら、何にかかって「結構」を使用しているのか、意識していない可能性もあり、このような場合、「結構」の意味が弱まっていると思われる。

例文(3)

いや、私、結構ねー、ま、映画は事実、俳優さんだからあれだけど、私、お笑いの人とか好きだから、あまり顔、関係ない。(『名大会話コーパス』data 086)



図4から、「けっこう」は書き言葉の中で、「ある」「いる」「高い」「いい」「楽しむ」「いける」等と多く共起していることが分かる。

図5から、「けっこう」は話し言葉の中で、「ある」「いい」「多い」「好きだ」「おいしい」「遅い」「若い」「高い」「言う」「言われる」等と多く共起していることが判明した。話し言葉で使用されている「けっこう好きだ」「けっこうおいしい」「けっこう言う」「けっこう言われる」のような表現は、書き言葉の「青空文庫」には見当たらなかった。

### 3.3.2 「かなり」に関する分析

本項では、「かなり」がかかる述語との結びつきの強さを分析するため、「かなり」と共起する述語との間の文節数を調べた。図6は書き言葉、図7は話し言葉を対象にしたグラフである。グラフ中の数字は、「かなり」と「かなり」がかかる述語が何文節離れているかを示したものである。

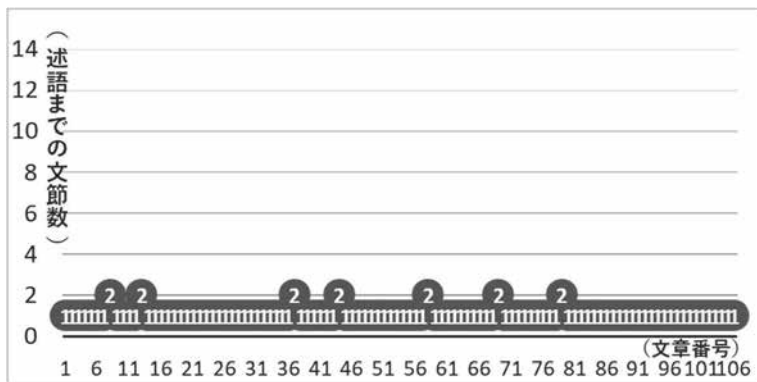


図6 「かなり」がかかる表現までの文節数（書き言葉）

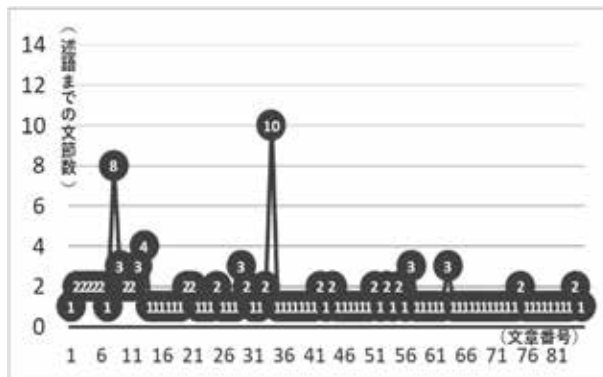


図7 「かなり」がかかる表現までの文節数（書き言葉）

図6から、書き言葉において「かなり」と「かなり」がかかる述語との間の文節数は平均1.06であり、前項3.3.1で取り上げた「けっこう」と比べれば、「かなり」の方が修飾関係の結びつきがやや強いようだ。例文(4)でも「かなり」と「かなり」がか



日本語の発話における副詞の意味・機能の弱まりに関する一考察—テキストマイニング手法と目視による分析を通して— (原田 朋子)

かる「違う」との結びつきは強いことが窺えるが、このような例が書き言葉に多数見られる。

#### 例文 (4)

パーソナルコンピューターとワークステーションの育ちはかなり違う。

(『青空のリスタート』 富田倫生)

一方で、話し言葉においては、図7のとおり、「かなり」がかかる述語との間の文節数が平均 1.56 であり、文節が離れているものがいくつか見られたものの、「けっこう」ほど多くはなかった。例文 (5) は「かなり」が「プラクティカルな」にかかっているか、「主眼点としてらっしゃる」にかかっているのか、判断が難しい。しかし、「けっこう」ほどではないにしても、例文 (5) のように、例文 (4) よりも修飾関係が明確でないものがいくつか認められた。

#### 例文 (5)

それから、そのプロジェクトの目的ってのは、かなり、やっぱり日本語教育のプラクティカルな辞書の作成っていうことを一応主眼点としてらっしゃるので…。

(「名大会話コーパス」 data 024)

次に、「かなり」がかかる共起表現を Wordcloud により示した。

図8は「青空文庫」で、図9は「名大会話コーパス」から抽出されたものである。



図8 「かなり」との共起表現 (青空文庫)



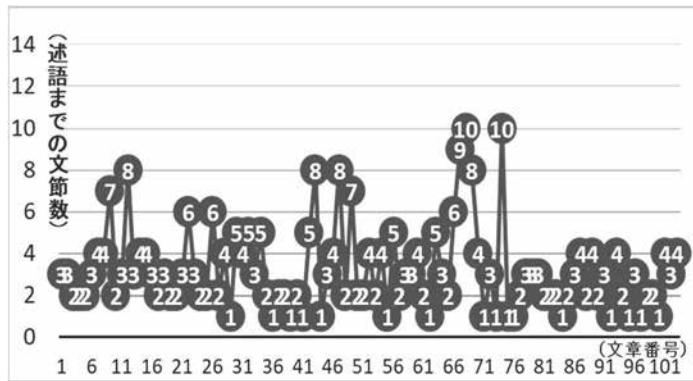


図 11 「たぶん」が呼応する述語までの文節数 (話し言葉)

「たぶん」と「たぶん」が呼応する述語との間の文節数は、図 10 の書き言葉では平均で 3.30 であり、図 11 の話し言葉では平均で 3.21 であった。渡辺実 (1971) の言葉を借りれば、「たぶん」には推量表現に先行して、その推量表現の予告をする誘導の機能があるのだから、程度副詞である「けっこう」「かなり」と異なり、「たぶん」が図 10、図 11 のような結果になるのは至極当然であろう。

さらに、既述のとおり、「たぶん」に誘導の機能がどの程度あるかを明らかにするため、「たぶん」が呼応する述語の表現形式の特徴を調べた。

図 12 は、書き言葉において「たぶん」が呼応する述語の形式の出現割合を示したものである。

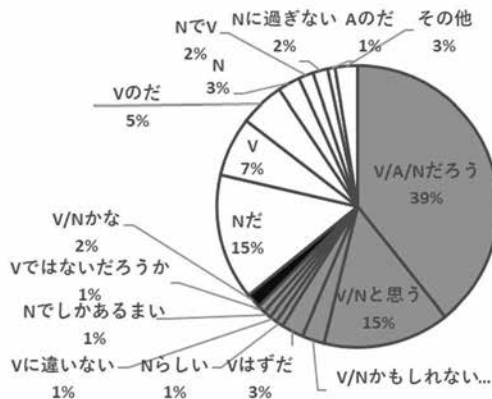


図 12 「たぶん」が呼応する述語の形式の出現割合 (書き言葉)

『明鏡国語辞典』には、「たぶん」は「断定はできないが、そうである可能性が高い」という話し手の気持ちを表す。」と記述されている。『明鏡国語辞典』のとおり、図 12 では、主に「V/A/Nだろう。」「V/Nと思う。」などの推量の意を表す形式が約 7 割弱を占め、他にも「Vに違いない。」のような強い推量、「Vはずだ。」のような推定、「V/Nかな。」のような自問等の意を表す形式が見られた。一方で、「Nだ。」「Vのだ。」「V。」



例文 (6)

ときどき、ジョギングの途中で犬に会うことがある。オレは犬は嫌いではないが怖い。たぶん、子供の頃に近所の犬に石を投げて噛まれたことがあるからだろう。

(『新世界交響曲』植松真人)

例文 (7)

「いま花蓮県の警察のトップ、日本なら県警本部長——将来は、たぶん台湾警察のトップ。台湾大学を出て、イエール大の法学部に留学し、九大の電気科にもいって (略)」

(『創世記考』西府章)

例文 (8)

A：稲垣吾郎が復帰しましたねー。

B：復帰したやつでしょ。うん。それ、おもしろかった？

A：おもしろくは、ないんですけど、なつかしいかなっていう。はい、久しぶりに。

たぶん、すごい視聴率高かったんですけど。

B：ね、その、稲垣吾郎って人気あるの？

A：はい。

(「名大会話コーパス」 data 096)

例文 (9)

A：非常勤は、もう全然違うの？

B：うん、非常勤はさー。

A：だれでもなれる？そんなことない？

B：だれでもじゃないけど、やっぱりマスターは取ってないと、うん、難しいんじゃないかなー。うん。でも別になんの保証もないしさー、ボーナスがあるわけでもないしさー。

A：あー、じゃあ、その助手なりなんなりになれば、ちゃんと公務員として働く感じ？

B：そうそうそう。そうなんですよ。

A：X大学来たら？

B：うーん

A：でも、私、いないけどもう。

B：コネ作ってよ。

A：えっ、うちあるのかな、そういうの？聞いたことある？X大学。

B：え、わかんない。わかんない。

A：たぶん、なんかねー、ないもん、大体、人文学部っていうのはあるけど、その中が何やっとなるかわからん。すごい変な先生ばかり。 (「名大会話コーパス」 data 082)

このような使用傾向は、書き言葉には見当たらなかった。先の項 3.2 において「たぶ

ん」は話し言葉では書き言葉の10倍近く使用されていることが明らかになったが、話し言葉においては推量の意味を明確化する他に、例文(8)、(9)のように、話し手の曖昧な心的態度を表しながら多用されており、「たぶん」の意味や機能が弱まっている例が存在していた。

### 3.3.4 「きっと」に関する分析

「きっと」は、『明鏡国語辞典』に、「①自分の推測が実現する可能性が高いという気持ち」「②話し手の決意が強いさまを表す」と記述されている。自分の推測が実現する可能性が高いか、低いかという側面に言及すると、前項の「たぶん」より「きっと」の方が、自分が推量・断定したことに対する表現主体の明確な気持ちが、やや強いと思われる。

本項においても、「きっと」と「きっと」が呼応する述語との間の文節数を示しておく。図14は書き言葉、図15は話し言葉を対象にしたグラフである。

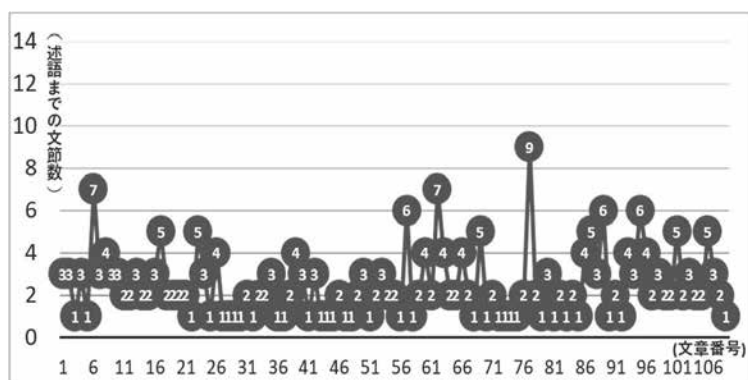


図14 「きっと」が呼応する述語までの文節数 (書き言葉)

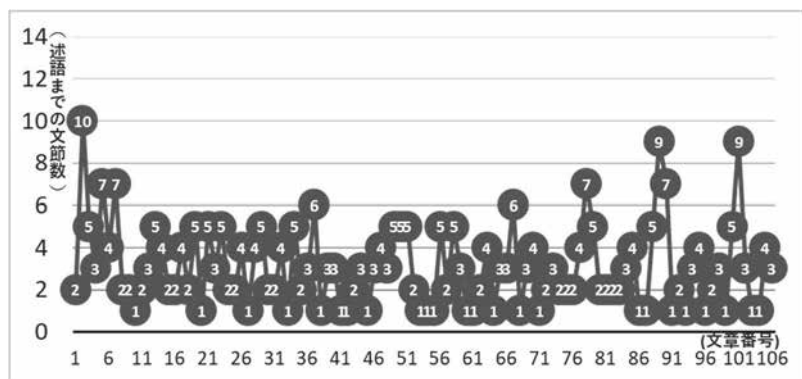


図15 「きっと」が呼応する述語までの文節数 (話し言葉)

「きっと」と「きっと」が呼応する述語との間の文節数は、図14の書き言葉では平均で2.48であり、図15の話し言葉では平均で3.09であった。「きっと」は推量・断定

表現に先行して、その推量・断定表現の予告をする誘導の職能があるため、「たぶん」と同様に、図 14、図 15 のような結果になるのは当然であろう。

次に、「きっと」についても、呼応する述語の表現形式の特徴を調べた。図 16 は、「青空文庫」において、「きっと」が呼応する述語の形式の出現割合を示したものである。

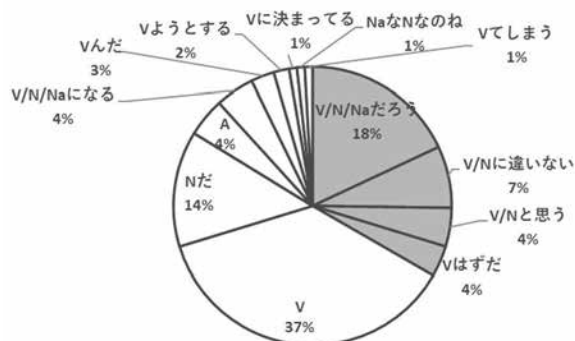


図 16 「きっと」が呼応する述語の形式の出現割合 (書き言葉)

図 16 では、主に「V/N/Na だろう。」「V/N と思う。」のような推量や、「V/N に違いない。」「V はずだ。」のような強い推量などの形式を伴うものが約 3 割強であった。一方で、「V。」「N だ。」「A。」「V/N/Na になる。」等の、言い切りの形式が約 6 割強見られた。「たぶん」と比べると「きっと」は、表現主体が推量・断定したことに対する明確な気持ちの表明の意がやや強いと先に述べたが、「きっと」が呼応する述語の形式の出現割合の結果からも、このことが裏付けられた。例文を見ても、(13) は「後悔するだろう」という表現主体の推測が実現する可能性が高いということを、「きっと」で明確に表されている。例文 (14) も、「働いて勉強した後、将来は出世するだろう」という話し手の推測が当たるに違いないという気持ちを「きっと」で明確化している。

例文 (13)

誰もが歯をくいしばった。泣いても笑っても練習は後二回、合わせて五時間だけなのだ。午前中の練習では基本の後、演武の練習が行なわれた。午後の打ち上げ練習で演武大会が行なわれることになったのだ。(中略)

打ち上げ練習目前で見学になっては、きっと後悔するだろうと思った。一年全員がそう思っていたようだ。(『自転車の夏』栗林元)

例文 (14)

「働いて、勉強して、きっと将来は出世するわ」(『闇の力』佐野良二)

図17には、話し言葉において、「きっと」が呼応する述語の形式の出現割合を示す。

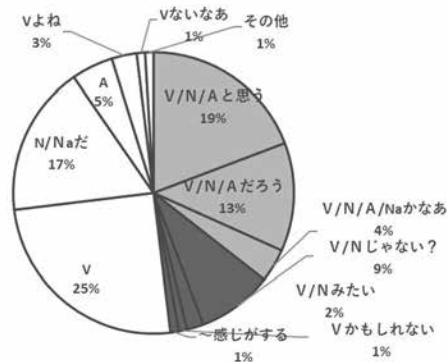


図17 「きっと」が呼応する述語の形式の出現割合（話し言葉）

図17では、「V/N/Aと思う。」や「V/N/Aだろう。」のような推量の形式を伴うものが約3割強であった。さらに、話し言葉において、「きっと」は、「V/Nみたい。」や「V/Nじゃない?」のような不確かな断定の形式を筆頭に、「V。」「N/Naだ。」等、断定の形式を使用しながらも、断定を避け、態度を曖昧化しているような例が認められた。例文(15)では、Aさんが「どちらかというと寒がりだけど、行動する分には割と…」のように話しているのに対して、Bさんが一旦、「大丈夫なんだね。」と確認し、Aさんが「うん、平気になる」と答えているにもかかわらず、Bさんは再度「きっと大丈夫なのかなー。」と大丈夫なのか、大丈夫でないのかについて断定するのを曖昧化している。このような例が「きっと」の使用例に際立って多かったというわけではないが、書き言葉には推量ないし断定を明確化しているものばかりで、例文(15)のような不明瞭な使われ方は一例もなかった。

例文(15)

- A：私なんかね、でもね、寒さに慣れてる感じだけど、でも私自身の体質はあんまり、こう、熱をばってこう、出さないタイプだから、どっちかっていうと寒がりね。  
でもそのくせー、寒い、寒いとか言いつつ、外に出て寒くっても、なんかぺろっとコートをちょこっと羽織って、平気とかなんかそういうところあるの。で、人に見られて、寒いよ、寒いよとか言って、寒くないよかと思って、平気だよかと思う。  
外に出るときは平気なんだけど、じっとしてると、あ、寒いってなっちゃうんだけど、行動する分には、わりと…。
- B：大丈夫なんだね。
- A：うん、平気になる。
- B：それしょうがないから、もうしてきてるし、きっと大丈夫なのかなー。  
でもね、前、H先生がおっしゃってたのは、いや、寒い地方の人は寒さに強いって



うけど、そうではなくて、もっと寒さに敏感、だ、だから、別に強いとか弱いとかじゃない。

A：じゃなくってー。

B：ただ、どういうふうに過ごすかは。

A：あー、知ってる。

B：知ってるから、どうしたらあったかいとわかるから、もちろんそうするけどって。

A：なんか、説得力あるね、H先生。 (『名大会話コーパス』 data084)

### 3.3.5 「べつに」に関する分析

本項においても、「べつに」と「べつに」が呼応する述語との間の文節数を調べた。

図 18 は書き言葉、図 19 は話し言葉を対象にしたグラフである。

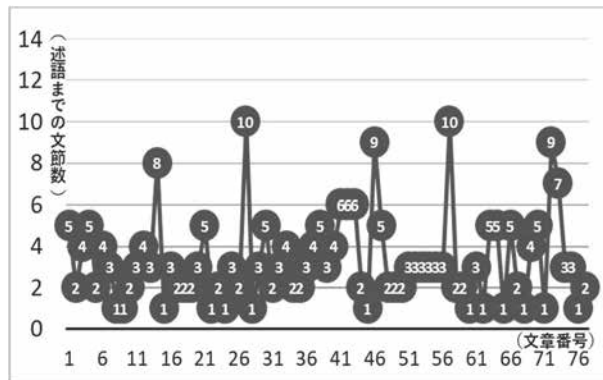


図 18 「べつに」が呼応する述語までの文節数 (書き言葉)

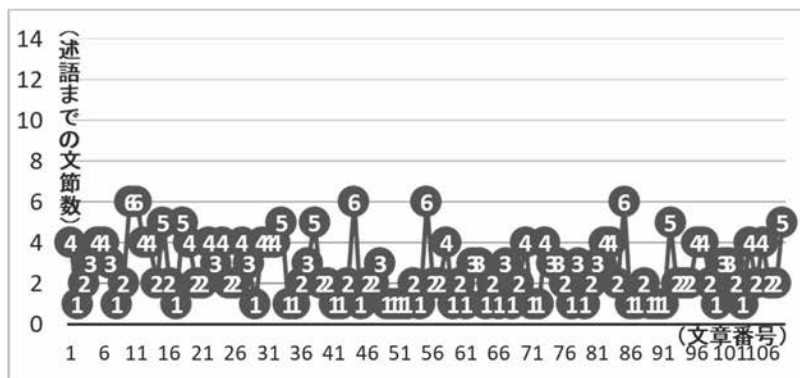


図 19 「べつに」が呼応する述語までの文節数 (話し言葉)

「べつに」と「べつに」が呼応する述語との間の文節数は、図 18 の書き言葉では平均で 3.34 であり、図 19 の話し言葉では平均で 2.60 であった。「べつに」は話し言葉において、呼応する述語とやや接近する傾向がある。

「べつに」は『明鏡国語辞典』に「①特別に～ない意を表す。」「②とりたてて～ない」

のように記述されている。図20は、書き言葉において、「べつに」が呼応する述語の形式の出現割合を示したものであるが、『明鏡国語辞典』の記述のとおり、「Nはない。」「Vない。」「Vわけではない。」「Aくない。」「Naじゃない。」といった否定を表す形式がほとんどであった。

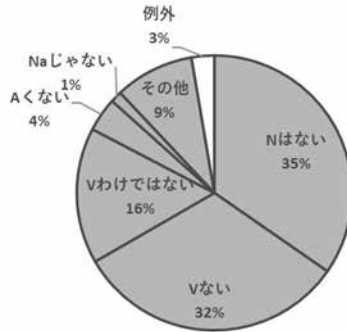


図20 「べつに」が呼応する述語の形式の出現割合（書き言葉）

図21は、話し言葉において、「べつに」が呼応する述語の形式の出現割合を示したものである。

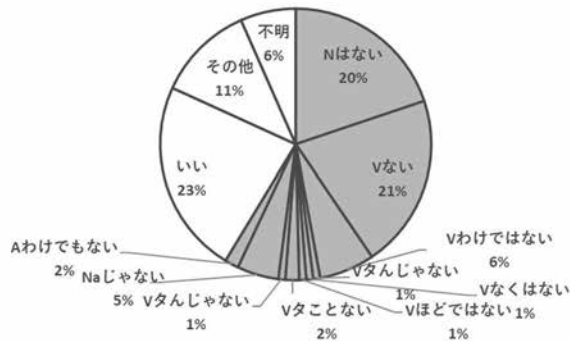


図21 「べつに」が呼応する述語の形式の出現割合（話し言葉）

図21においても、「Nはない。」「Vない。」「Vわけではない。」「Na じゃない。」といった否定の形式が約6割を占めていたが、図20にはほとんど見られなかった「いい」のような肯定の形式が2割以上見られたことが顕著な相違点であった。

例文(16)は、書き言葉における「べつに」の例だが、例文(16)の「別に」は「特別に／とりたてて急ぎの用事があるわけではない」のように否定の意味を明確化している。

例文(17)、(18)、(19)は、話し言葉において「べつに」が使用されている例である。例文(17)は、「別に構わん」のように「別に」が、構文的には否定の形式を取っているように見えるが、意味的には肯定の意を補足している。例文(18)は、例文(17)の「構

わない」が「いい」に転じたかのような例だが、「別に」が「こっちでもいい」を補足しているとも考えられるが、例文 (16) と比べれば、「別に」自体の意味が弱まっているように思われる。例文 (19) の「別に」は「大丈夫だよ」と辛うじて呼応しているようにも見えるが定かではなく、「別に」の意味や機能はかなり弱まっていると考えられる。このような例が、話し言葉においては複数見られた。

例文 (16)

どのくらいで止むだろうか。頭の上では雷鳴がとどろいている。別に急ぎの用事があるわけではないが足止めを食らうというのは気の滅入ることだ。 (『UV』石塚浩之)

例文 (17)

A：東海通でいいよ。

B：うん。あーびっくりした。帰っても戻れんことはないんだろうけど。ちょっと、それはさすがにAちゃんに悪いわ。

A：や、俺は別に構わんよ。

B：いや、いや。ほんとよかったー。 (『名大会話コーパス』data087)

例文 (18)

A：行きまひよか。

B：お願いします。

A：はあー。もうすぐでしょう。

B：うん、もうね、で、えーと左、こっち出て。さっき来た方に、ごめん。別にこっちでもいいけど、こっちから出た方がたぶん出やすいと思うの。お願いしもうす。ごめんね。間に合う？ (『名大会話コーパス』data004)

例文 (19)

A：で、今回のこの中・上級の実習も、あの一、昨日の朝の段階で受けさせてもらえることになって、それまでは全然返事がなかったんですね。で、学務から言うと、なんか、やっぱり木曜日の分を受けてないんで、受けづらいと思うからやめた方がいいんじゃないですかって言われるんだけど、でも、一応あの、先生に聞いてみますって言われて、で、先生は別に全然ほかの、あの、内容とは違うんで大丈夫だよって言ってくださって、で、どうするっていう、朝、が、の連絡が昨日の朝来て、えーっとか思って。

B：すごいあれですね。ぎりぎりまで。 (『名大会話コーパス』data043)

### 3.3.6 「やはり」に関する分析

「やはり」は、『明鏡国語辞典』に、「①予想や予兆が事実とぴったり一致するという



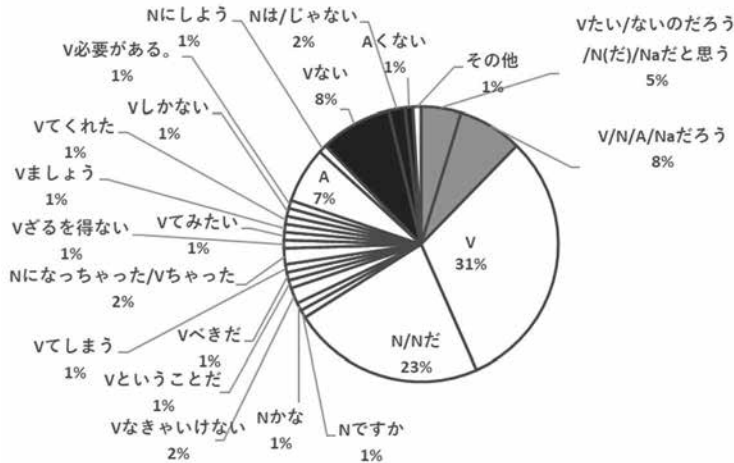


図 24 「やはり」が呼応する述語の形式の出現割合 (書き言葉)

「やはり」は、表現主体の何らかの評価を明確化したり補足したりするが、図 24 から、「やはり」は「たぶん」「きっと」「べつに」と比べ、例えば、「～と思う。」「～だろう。」のような推量や、「～ない」のような否定表現等の特定の構文を強く要求せず、断定の他にも、「Vなきやいけない。」「Vてみたい。」「Vということだ。」「Vましょう。」「Nですか。」「Nにしよう。」等々の、実にさまざまな構文的展開を取る。また、「やはり」は、それを取り除いても、文のコトガラ的内容、事態には変化がなく、用言述語以外に体言述語にも自由にかかりうることから、述語の陳述的な側面にかかわっていると言える。しかし、「やはり」は誘導の職能の観点からは、特定の構文を強く要求しないので、陳述副詞に典型的に認められる副詞の中では、かなりニュートラルな副詞のように思われる。

図 25 は、話し言葉において、「やはり」が呼応する述語形式の出現割合を示したものである。

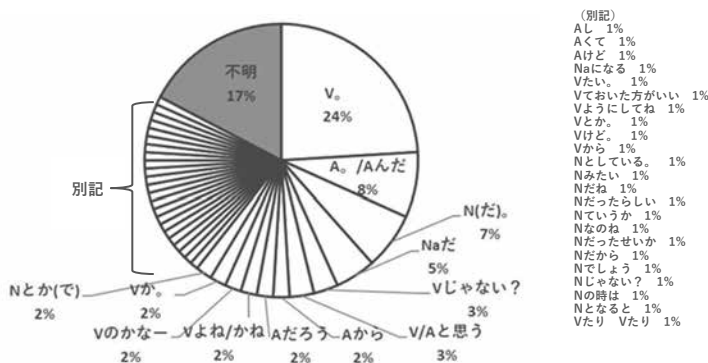


図 25 「やはり」が呼応する述語の形式の出現割合 (話し言葉)

図25から、「V。」「A。 / A んだ。」「N (だ)。」「Na だ」など、普通の述語の形式の他に、「やはり」は「たぶん」「きっと」「べつに」と比べると、さまざまな述語の形式と呼応しており、特別の言い回しを要求しないことが判明した。また、「やはり」がかかる述語が不明なものも多く見られた。

例文(20)～例文(24)は書き言葉に現れた「やはり」の例である。例文(20)では、「九万の間違いではないか」と期待したが、事前に危惧、予想したとおりの結果だったことを表している。例文(21)は、事態の変化が期待されたにもかかわらず、依然として事態は変わらなかったことを表している。例文(22)の「やはり」は、「写真家が他と同じく「この高校の卒業生である」ことを表している。例文(23)の「やはり」は結局のところ「自分でやらなきゃいけない」という意を表している。例文(24)は、「大佐と私しか知らない」という前提に立ち戻って考えると、という意を明確化している。

コンテキストから、「やはり」には何らかの前提があった上で、後続する部分の評価を明確化したり補足したりしている。

例文(20)

せめて九万の間違いではないかと、指で0を数え直してみたが、やはり0は三個だった。  
(『松平維秋の仕事』松平維秋)

例文(21)

母は私の一流ピアニストとしての舞台の姿を常に心に描いていたのだと云って歎いた。しかし、私の精神状態では、これ以上ピアノと取組むことは不可能であることを認め、強制すれば、又自殺しようという気になることを恐れて私を暫く自由にさせることを父や兄と相談の上でゆるしてくれた。(中略)私は単身上京した。しかし流暢なアクセントになじめないですぐに帰って来た。私はやはり死に度いと思っていた。感傷ではなかった。唯、私は苦しみから逃避したかった。  
(『灰色の記憶』久坂葉子)

例文(22)

「こちらの高校を卒業しました中野玲子と申します。一年ほど前、やはり卒業生で私の先輩にあたります写真家がこちらで講演をなさったとき、私は秘書役でついてまいりました。」  
(『道順は彼女に訊く』片岡義男)

例文(23)

純喫茶の延長上でジャズをかけてるに過ぎない。だから『これはやっぱり、自分でやらなきゃいけない』と思った。  
(『松平維秋の仕事』松平維秋)

例文 (24)

世界中に私しきゃ、大佐と私しか知らないことなんだ、だから、やはり、ここに書けない。  
(『幾度目かの最期』久坂葉子)

次に、話し言葉には、以下のような例が見られた。例文 (25) の「やはり」も「300万から500万」と予想したが、「400万円ぐらい。」と聞いて、予想した通りだったという話し手の評価を下しているように思われる。例文 (26) も前から思っていた通り、予期せぬ事態に備えて「携帯があるといいな」という意を表しているようだ。例文 (27) は「その先生」がずっと女子校でという話の前提があり、予想通り或いは女子校卒の他の人と同じくという意味があるように読み取れる。

一方で、例文 (28) では、会話と会話の間に〈間〉があり、「やっぱり」から話し始めているが、コンテキストを遡ってもクリスマス話題は出てきていない。そのため、この下線部の「やっぱり」は、接続表現「ところで」のような形で、話題の転換をしているか、フィラーのように話題の切り出しをしているようにも見える。言葉にはしていなくても、話し手の頭の中に何らかの前提があるのかもしれないが、下線部の「やっぱり」より前に、後続の部分と特に脈略もないことから、この「やっぱり」の副詞としての意味や機能はもはや見出せない。例文 (29) における下線部の「やっぱり」は、談話の内容、事態そのものに関わる評価や判断の表出というよりも、聞き手に配慮し、その場を収めるような働きをしているように思われ、明確に言いにくいことを言いよどみながら話しているように受け取れる。例文 (30) の「やっぱし」も事態そのものに関わっているというよりも聞き手を意識しているのか、「やっぱし」の意味が定かではない。例文 (31) の「やっぱ」も副詞としての意味が弱まっているように思われる。強いて言うなら、「やっぱ」によって発話権の維持をしているようにも見えるが、「やっぱ」によって発話の何を明確化ないし補足しているのか、話し手自身も意識していないかもしれない。

例文 (25)

A: 今何かエステイマ買うためにねー、貯金してるらしい。あーそう。

B: ハイブリッドっすか。

(中略)

A: いつ買うの、いつ買うのって、2年後らしい。

B: 結構しっかりしてるわね。いいねいいね。

A: 一括で買いたいとか言ってる。

B: 300万? さ、500万? 300万? 結構するよねー。

A: 400万円ぐらい。

B: あ、そんなにする、あ、やっぱそれぐらいするんだ。

A：うん、で、何かナビとか一、あと全部何、こう快適に過ごしたいらしいもんで一、私がルーフつけといて一って。ま、そこまでもってたらの話だけど、ルーフつけといて一って。  
(「名大会話コーパス」 data019)

例文 (26)

A：範囲だよね一、うん。それだったら、まあ、携帯で連絡取ってね一、本当、なんかあってさ一、予期せぬ事態とかでさ一、遅れたときとかも一、大丈夫だよね一。  
B：うん。うんうんうん。わかる。なんか、電車とか止まっちゃったりしたらさ一、あれだもね。電話できない。  
A：うーん。そう。  
B：どうしようどうしようと思って。やっぱ携帯があるといいなって。  
A：ね一。ほんと携帯ない生活って戻れないよねもう。(「名大会話コーパス」 data071)

例文 (27)

A：うちのね一、何か、あたし女子校だったんだけど、何か、女の先生、結構若いのにね、うちの学校入ってきてね、何かもう、その先生もううちの\*\*\*卒だったりするの。何か、そうするとさ一、何かほんとに世間知らずじゃん、ずっと女子校で。で、また女子校の先生とかして、結構、何か、やっぱ考え方も偏ってるわけ。そういうのにはなりたくないとか思って。うん。OLも楽しそうだよな。  
B：うん、そうだろうね。(「名大会話コーパス」 data066)

例文 (28)

A：ほんと\*\*\*ってセンスがあるかもしれんねえ。  
B：そればっかではないけどねえ。  
C：そう言いながらそうやってなぐさめて。  
A：そう言ってなぐさめてセンスばかりじゃないよね。材料もあるよね。  
C：て、言いながらなぐさめないとほんとに。  
B：…。  
〈間〉  
B：やっぱりでもクリスマスなんてお祭りだからある程度にぎやかにいっぱいつける、やっぱりついてる方がいいんやろねえ。  
A：そうだよねえ。  
B：ねえ。あの、地味より。(「名大会話コーパス」 data060)

例文 (29)

A：落ちたのもありましたよねえ。



B: そうそうそうそう、落ちたっていうのもあるけど、その、何ていうの、天候が悪いのでっていってちょっと不時着しますとかさ、あの、出発が遅れるとか、その、何かこう、着陸がね、あれだったりとかその、最寄りの空港に寄っちゃったりとかっていうのってあるじゃん。で、そういうの別にマスコミに気がつかれなかったら全然報告する必要ないでしょう。で、実は危なかったてさあ。

A: もう公然と言われてますからねえ、X航空は危ない、危ないって。飛行機があれなんですよ。何かあの一、ほかの会社で使った飛行機を中古で買ってるっていう。

B: あ、そうなんだ。ふーん。

A: 確かそーんな話聞いたことありますけどねえ。

B: 何かさ、俺はさ、ほんとに何ていうの、気質としてはその、そういう、あの、X国人の気質にすごく合ってる、で、全然何ていうかこう、嫌な感じは全くしないんだけどさあ、やっぱりねえ、確かにこう、俺が見ても、あー、やっぱりちょっとこう、何ていうの、いいかげんっていうか、こう、あー、大丈夫大丈夫っていう感じがすごくあるみたいでさあ。  
(「名大会話コーパス」 data093)

#### 例文 (30)

A: あーそうそう、大体そんなもんですよ。年に1回のときも、だから20回ぐらいになりますね。3回行ったこともある。

B: 50から60の間に年に2回から3回行かれる。

〈間〉

いいですねー。

A: あ、あとポルトガル。

C: ポルトガル、もっとなんか質素だとかいいますけど。やっぱり。あー。

B: あ、そうですか。

A: 空家ばかり目立っちゃう。

B: 治安は？

A: 治安は悪くないです。イタリア並みとかね。日本ほど、日本ほどはよくないですよ。うーん。  
(「名大会話コーパス」 data028)

#### 例文 (31)

A: いや、もしもして言わないと会話が始まらないよね、電話ではね、そんなのは。なんて言うっけ、なんかさー、すごいあのときおかしかったよね、X先生。うちの娘なんかはー、よく男言葉でしゃべるんですよー、皆さんもそうなんですかーあ？って言ってさ。

B: 最近、もう、もう見た目も男も女の、もう区別がなくなってきましたよねーえ、とか言ってさ、なんか。

A: いや、わかるよ。やっぱ、なんだったっけー?なんか、Xさんが男言葉を使うって。

B: 食う。

A: 食うか。でも食う、だよな。ほんと普通に使うよね。でも私も注意される、それ、食うって言う。ねー、なんか、なんか食いたーいとか言う、やめなさいってIが怒る。うふん、なんですか、食いたって、うふんって怒る。

(「名大会話コーパス」data070)

#### 4 おわりに

以上の分析から、全体の傾向として、「けっこう」「かなり」「たぶん」「きっと」「べつに」「やはり」は、頻度の差はあるものの、書き言葉より話し言葉において、多用されていることが確認できた。

文頭、発話頭の出現率の分析では、書き言葉に比べて、話し言葉の発話頭で、「けっこう」「たぶん」「べつに」「やはり」が極めて多く使用されることが判明した。

本稿で取り上げた「けっこう」と「かなり」は、既述のとおり、程度副詞の潜在比較構文と位置付けた。書き言葉の場合は、「けっこう」「かなり」がかかるとの結びつきが強いが、話し言葉では、「けっこう」「かなり」とそれがかかるとの間の文節数の観点から、「けっこう」や「かなり」と、それがかかるとの距離が離れ、結びつきが弱まり、シンタクスレベルの機能が弱まっているものが見受けられた。

陳述副詞については、後続する部分に特別の言い回しを要求するという構文的職能の強いものと、それほど強くないものがあるようだ。このような誘導の職能が強いものは、話し言葉であっても、副詞としての意味が弱まりにくいと考えられる。しかし、「たぶん」「きっと」「べつに」は、書き言葉においては特定の言い回しを誘導していたにもかかわらず、話し言葉では誘導の職能が弱まっていた。

「やはり」は、書き言葉においても、他の陳述副詞ほど特定の言い回しを要求せず、誘導性が弱く、さまざまな評価の意味を有する陳述副詞のニュートラルなものと考えられた。話し言葉になると、話し手の述べたいこと的前提も現れていないものが複数見られ、「やはり」の副詞としての意味も機能も弱まり、まるで接続表現であるかのように振る舞ったりするものや、事態の内容そのものに対する話し手の評価ではなく、聞き手や談話の場に対する配慮がなされ、フィラーのように振舞って使用されている例が見られた。

副詞の分類に関連して述べると、客観的な描写を表す様態副詞ではなく、「けっこう」「かなり」のような潜在比較の程度副詞が話し言葉において、意味が弱まる傾向があり、陳述副詞については、話し言葉において、「たぶん」「きっと」「べつに」等の誘導の職能が弱まった際に、意味も弱まる現象が起これると考えられる。また、「やはり」のように、さまざまな評価性のあるもので、且つ話し言葉で多用される副詞が、本来の意味が軽化し機能弱化する傾向があることが明らかになった。

しかし、本研究では「けっこう」「かなり」以外の潜在比較の程度副詞や、「やはり」以外の評価性の高い陳述副詞について触れることができなかった。これは今後の課題としたい。

## 注

- 1 『名大会話コーパス』は、科学研究費基盤研究 (B) (2) 「日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究」(平成 13 年度～15 年度 研究代表者大曾美恵子) の一環として作成された、日本語母語話者同士の雑談を文字化したコーパスである。現在は国立国語研究所に移管され、文字化テキストなどを公開している。
- 2 R とは、ニュージーランドのオークランド大学統計学科の Ross Ihaka とアメリカのハーバード大学の生物統計学科の Robert Gentleman により開発が始められ、1997 年以降、多くの賛同者によって開発が続けられているオープンソース方式のデータ解析・処理の専用ソフトのことである。詳しくは、金明哲 (2017) 『R によるデータサイエンス』を参照されたい。
- 3 ibukiC とは、岐阜大学工学部応用情報学科の池田研究室で開発された、形態素解析だけでなく、係り受け構造を意識した文節単位と文節内の構造を分析するソフトウェアであるとされている。

## 参考文献

- 川端善明 (2000) 「日本語の品詞—口語を中心に—」『集英社 国語辞典』第 2 版, 森岡健二・徳川宗賢・川端善明・中村明・星野晃一, 集英社, pp.1944-1945.
- 北原保雄編 (2010) 『明鏡国語辞典』第 2 版, 大修館書店
- 金明哲 (2017) 『R によるデータサイエンス』第 2 版, 森北出版
- 工藤浩 (2016) 『副詞と文』ひつじ書房
- 原田朋子 (2021) 「日本語の発話における談話標識の一考察—テキストマイニング手法と目視による分析を通して—」『同志社大学 日本語・日本文化研究』第 18 号, pp.1-27.
- 藤村逸子・大曾美恵子・大島デイヴィッド義和 (2011) 「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」藤村逸子・滝沢直宏編『言語研究の技法：データの収集と分析』ひつじ書房, pp.43-72.
- 渡辺実 (1971) 『国語構文論』塙書房
- 渡辺実編 (1983) 『副用語の研究』明治書院
- 渡辺実 (1996) 『日本語概説』岩波書店
- (2002) 『国語意味論』塙書房

## 例文出典

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所, 『現代日本語書き言葉均衡コー

パス』, <https://ccd.ninjal.ac.jp/bccwj/index.html>

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所, 『日本語話し言葉コーパス』,  
<https://ccd.ninjal.ac.jp/csj/>

青空文庫, 『青空文庫』, <https://www.aozora.gr.jp/>

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所, 『名大会話コーパス』, <https://mmsrv.ninjal.ac.jp/nucc/>